

として有力な武器になることは間違いない。現在成層圏の data や map が期間的に少ない上にそれらが一部の大学、研究所とか限られた気象官署にだけしかないため研究調査が非常に限定された分野だけでしか行われていなく、かつその研究歴史の新しいこと等が隘路となっているので、対流圏の等圧面天気図と同じように十分駆使できるよう、成層圏天気図や資料を整備するよう希望したい。

V. 討 論

広田 (東大) : Charney and Stern は不安定の必要条件しか与えていない。したがって昇温発生を充分説明できないのは止むをえない。やはり擾乱の構造の議論にまで立ち入る必要があるのではないか。

村上: Internal Jet というモデルでは一般流 U は水平にも垂直にもシアをもち ϕ と P の函数である。このような場合には固有値問題として取り扱うことは困難である。固有値の符号がきまるだけである。固有値がきまらないから擾乱の構造もきめられない。 U が ϕ と P の函数の場合は初期値問題として取り扱う方が簡単である。

大内 (大阪学芸大) : Sudden Warming の原因は太陽活動にあるのか。

朝倉: かつて Scherhag は1952年の突然温暖化が太陽面爆発があった時期と合うことから、太陽活動に関連さ

せて考えたが、同じ現象を Wexler が 50mb 天気図で解析し、Labitzke は近東の温暖域がベルリン上を通過したことを確かめた。また、太陽面爆発がないときでも突然暖化がおきていることから、太陽活動説はその支持を失ないつつある。Scherhag 自身さへ、主張していないという。しかし、ロケット観測によると突然温暖化は 50km 前後のストラトポーズ付近にはじめにおこり、それが次第に下層に及んできている。これは太陽活動説に有利なように考えられるが、量的に説明するにはエネルギーがたりない。Wexler は「引き金作用として流れの中に下降気流をおこさせることは可能」であると主張している。成層圏中の運動エネルギーは対流圏から補給されているのが平均状態である。ストラトポーズに温暖化をひきおこす下降気流の原因が対流圏にないとはいえないのでなからうか。

藤田 (気研) : 中国では 2 年周期を用いて、長期予報ができるかといっていたが、これは 26 カ月周期とどういう関係か。

朝倉: 中国の例は 1953~58 年について述べたことで、その後は 2 年周期がくずれている。しかし、26 カ月周期はその後も持続しているので別なものと思われる。26 カ月周期は低緯度に源をもつ周期変動で、中緯度以北では卓越していない。突然温暖化の高温域が東進したり西進したりするのは低緯度地方に源をもった温暖化のときだけであって、高緯度地方にまでは及ばない。

北京科学シンポジウム募金会計報告

1964年北京にて開催された北京科学シンポジウムには、日本代表団の団員として日本気象学会から会員小平信彦、増田善信両氏が派遣されました。また会員久保田靖之氏も日本代表団通訳として参加し多大の成果をあげることができました。上記両氏の派遣については会員の皆さんから募金その他について物心両面の御協力を戴き、また帰国後は、日本気象学会の各支部、各関係気象官署、および全気象労働組合の御協力を得て、各地で報告会を開くことができました。

現在まで報告会のもたれた場所は気象研究所、気象庁、東京航空気象台、気象大学校、仙台、札幌、函館、大阪、下関、福岡、彦根、京都、舞鶴の各地です。また去秋福岡で開かれた日本気象学会秋季大会では小平、増田両会員により詳細な報告が行われました。

ここに募金の会計報告をかね、その後の簡単な経過と

日本気象学会国際学術交流委員会

お礼の言葉を述べたいと思います。

会 計 報 告

取 入		支 出		
	口数	金額(円)	金額(円)	
関東地区	838	83,800	渡 航 費	360,000
東北地区	85	8,500	日連協加盟費	1,000
九州地区	20	2,000	通 信 費	840
北海道地区	41	4,100	行 動 費	1,895
関西地区	271.3	27,130	書籍購入代	300
学 会		50,000	印 刷 費	3,200
大口寄附		209,000	報告集会旅費	87,000
全気象寄附		70,642	維 持 費	465
書籍販売		780	雑 費	1,252
計		455,952	計	455,952